姶良歴史ボランティア協会広報誌第 11 号　　発行日　平成 22 年 10 月 14 日(木)

あいらの歴史と物語

発行責任者：姶良歴史ボランティア協会
会　長　橘 木 雅 晴
編　集　者：広報部長　竹之下　洲　一

連絡先：〒899-5421 鹿児島県姶良市東餅田 498　　姶良市歴史民俗資料館 TEL 0995(65)1553

ガイド練習報告　加治木町史跡めぐり①

加治木の古代官道を想う

竹之内　和　仁

先年船津の別府川沿いの細長い田んぼの下から、側溝・轍（わだち）などの道路遺構が発掘され古代官道の跡であることが判明しました。

太宰府から薩摩国府－蒲生－大隅国府へ通じる官道で、要所に駅家（うまや）が設けられていました。中央との往来は、我々が考えている以上に進んだものであったと思われます。

船津で別府川を渡った官道は、鍋倉の前を通過し、五老峯の北側を通り加治木に入ったのではないでしょうか。さらに蔵王岳をめざして進み日木山の台地を経由して大隅国府に至ったのではと思われます。

想定した官道筋には、古代からあったと思われる伊勢神社、岩屋寺跡、春日神社、三代寺遺跡のほか、現在発掘中の市頭遺跡などがあります。これらの史跡を秋空の下散策してみたいと思っています。

海岳山東楽寺墓地

本　多　幸　子

東楽寺は、加治木町朝日町にあった寺で今は墓地だけが残っています。

毓英館（いくえいかん）の創立や加治木の文教のため偉大な功績を残した伊藤世粛、斉彬公に召し出された江戸の鋳物師道也のもとで十余年修行し、鉄

池家の墓群前

瓶・茶釜・花瓶など立派な作品を残した川畑道仁、刀匠として有名な池家の墓群、水巴に千鳥庵の号を与えた武州の俳人蕉下庵玉笥の墓などがあります。当時の人々のいきいきとした生活のあとがしのばれます。

この場所は、桜島や錦江湾・五老峰の美しい景色が一望できる最高の場所だったのではないでしょうか。

本誓寺墓地と運誉上人

橘　木　雅　晴

朝日町にあった本誓寺は、島津義弘が、平松城から加治木に移った後の 1611 年に建立されました。その時の開山は運誉上人でありました。

運誉上人は、島津氏九州制覇進攻で義弘が肥

相良藤次の墓前

後の阿蘇氏を攻略中、新納旅庵が住職だった八代荘厳寺で初めて義弘に出会いました。秀吉の九州進攻に敗れた義弘が飯野から栗野に移ると栗野に願成寺を建立し、さらに義弘が帖佐に移ると願成寺も移しました。その後鹿児島の不断光院や筑後の善導寺の住職を勤め、義弘が加治木に移ると本誓寺を開山しました。

義弘や家久は風光明媚なこの寺を度々訪れ、歌などを創って名僧運誉上人に与えています。

この墓地には開山した運誉上人をはじめ、関ヶ原敵中突破で義弘を守った本田親商、江戸初期の医学者森山亨庵、江戸中期の女性俳人千鳥庵水巴、江戸後期の画家本田羅山、お由羅騒動斉彬派の相良藤次の墓などがあります。

研修視察発表
日置市の史跡

妙音十二楽奏（『妙音十二楽保存会報　第８号』写真より

中島常楽院（薩摩琵琶伝承の寺）

坂元　清美

初代忠久が建久７年（1196）薩摩の当主になった際、島津家の祈祷僧として宝山検校（けんぎょう）（盲人の最高級の官職）を招きました。宝山検校は京都天台宗常楽院の 19 代住職で、本尊妙音天を奉持し中島に常楽院を建立したと伝えられます。歴代の住職は各地で島津氏の威徳高揚に努め，琵琶を吟弾し,仏法を広めました。このとき弾奏された琵琶が後年薩摩琵琶に発展していったといわれます。今でも毎年 10 月 12 日に県内外から僧侶が集まり妙音十二楽を演奏しています。

妙音十二楽は、薩摩盲僧の間に伝承された宗教音楽で、琵琶・笛・太鼓・手拍子など八種類の楽器で「松風」「村雨」などの十二曲が演奏され、また同時に釈文も読誦されます。

妙音十二楽と中島常楽院は、鹿児島県の文化財に指定されています。

光禅寺（コゼシ）の墓

吉田　茂子

日置の基礎を築いた人、日置島津家３代常久は幼少のときに父(忠隣)を戦で亡くし、さらに５歳のころには祖父(歳久)が痛ましい最期を遂げ、若年にして二人の肉親と別れます。

祖母(歳久夫人)によって養育され、８歳のころ日置に移り住み、やがて領主となった常久は郷内に多くの神社を建て尊崇しました。

父や祖父のために寺を再興し菩提寺を定め、朝夕追善供養したと言われています。

常久は 28 歳の時、天然痘で病死し、日置島津家の菩提寺である大乗寺に葬られます。

領主が代わり６代久竹の時代に、祖母の眠る寺の墓地に常久の墓を移すことが、子孫のせめてもの供養と考えて改葬し、光禅寺と名を改め、奥方と共に安置されました。

光禅寺は明治の廃仏毀釈まで、村民によって守られていたそうです。

ザビエルの市来城訪問と新納旅庵

藤崎　幸雄

ルイス・フロイス『日本史』の記述によれば、「ザビエルは市来城家老のとりなしで、鹿児島からアンジロウを伴い6レグア離れた市来城を訪れました。城主新納康久より歓待され、奥方や子供たち（長男又八郎、二男久饒（ひさのぶ）等）、家老やその家族など15人に洗礼を授け、家老にはミゲルの霊名を与えました。しかし城主のみは領主を憚って洗礼を見合わせ」たそうです。

のち義弘公の家老で黒衣の宰相と呼ばれた康久の三男旅庵は、1553年生まれです。『日本史』には「1561年貴久公の招きにより来鹿したアルメイダによって洗礼を授けられた」とあります。僧籍をもったままでキリシタンになったわけで、それが矛盾しない時代でありました。それはキリスト教が天竺渡来の仏教の一派と理解されていたからであろうと思われます。

市来城入口に建つザビエル像

旅庵は幼少時出家し長住と名のり、34歳の時八代の荘厳寺の住職となり旅庵と改めます。なお、旅庵の墓は帖佐の願成寺にあります。

有馬新七

恒見　勝則

有馬新七は、文政8年(1825)、伊集院郷士坂木四郎正直の三男として生まれました。新七3歳の時父正直が鹿児島城下の有馬家を相続したため、有馬姓を名乗ることになります。

幼少期から文武に励み、19歳で江戸に遊学します。このころから尊王論を説くようになり、藩内では「今高山彦九郎」と呼ばれたといいます。その後、西郷・大久保らおよび他藩尊王志士とも親交を深めていきます。

文久2年(1862)、伏見寺田屋において、倒幕を企て京都所司代を襲撃する計画を進めましたが、久光が派遣した鎮撫使と斬り合いとなり新七はこのとき惨殺されました。結果薩藩尊攘派は壊滅的打撃を受け、久光は強い憎しみを受けるようになりました。

一宇治城跡の前

梅天寺跡

松元　淳一

梅天寺は日置市永吉にあった寺です。元中2年(1385)石屋真梁が妙法寺を建立しました。後に永吉島津家がこの地に封ぜられたとき、日向佐土原の梅天寺にある家久(島津4兄弟・末弟)の墓をこの地に建てて、梅天寺と改めました。家久の墓は日向佐土原にもあり、永吉島津家初代家久の墓や五輪塔などが残っています。

家久は天文16年(1547)伊作亀丸城で生まれ、島津の九州制覇の先頭で戦った勇猛果敢な戦国武将です。天正15年(1587)6月5日、日向佐土原で原因不明の急死をとげました。死因は諸説ありますが、今なお謎のままです。享年41歳、法名長策號梅天といいます。

永吉島津氏初代家久の墓

姶良市内の史跡紹介⑤（蒲生町）

青敷野牧

西田　實

青敷野牧という牧場は、今から約600年前(応永年間)、蒲生家の10代目清寛の時代にはじめて造られ、明治3年まで続きました。

馬の牧場があった青敷

牧場の周囲2里半(約 10 km)に空堀を掘りめぐらし、出入り口には格子門を設置した立派な牧場だったといいます。

全区域を四つに分けて放牧し、それぞれに水飲場・食塩場を設け、種馬一頭を放ち自然に産馬させていました。牧司と監視の役人が弓矢を携えて馬上から牧場を巡視していたそうです。

この四か所に放牧してあるすべての馬を一か所(苙)に追い集めて二才駒を捕らえる勇壮な「馬追」が、毎年4月に行われていました。

歴史用語解説

（竹之下　洲　一）

『古代官道』　律令制度下、都を中心に七道の諸地域へのびる、国家が管理する道路。都と地方国府を結ぶ駅路と、それ以外の伝路からなる。駅路では駅制がしかれ,16 km毎に駅家が設けられ、官吏が公用に利用した。

姶良市には、船津に官道の一部が発掘されている。『延喜式』によれば、大隅国には蒲生・大水に駅家がおかれたとあるが、その場所は考古学的調査によって確定されていない。

『毓英館』　鹿児島の造士館に遅れること12年の天明4年(1784)、加治木島津第6代久徴が、長崎の伊藤世粛を招き創設した学校である。当初は現在の愛宕神社近くに建てられたが、のち仮屋町の検察庁のところに移転し、明治期を迎えた。薩摩教育の進歩・向上に大いに寄与した。

『牧』　薩・隅・日三州は古くから馬の産地で、「当地は一家に女馬3～5匹も飼い、九州はすべて当国の駒を用い、日向・大隅から年々三千匹も産する」(『西遊雑記』) といわれるほどだった。藩は馬牧を設けたり、奥州馬や外国種を入れたりして、馬の改良保護を行った。

文化8年(1811)「上使様御通之節答書覚」によると、藩の設けた馬牧は全部で20ヶ所あり、藩内で馬数の多い牧は福山野(2219)、吉野(457)などで、市内の牧としては青敷野(蒲生39)があった。(　　) 内の数字は馬の疋数

姶郷（あいきょう）

帖佐叺（つさかまげ）

佐土原　保　子

鹿児島では帖佐を「つさ」と呼んだ。叺は国字であって漢字ではない。「かます」(「かまけ」) と読む。

わらむしろを二つ折りにして横縁を縄で綴じ合わせて袋状にして穀物・塩・肥料等を入れるもので、鹿児島・大隅・姶良ではかまげ、南薩ではかまっ・かまぎといった。

かますの語源は、昔蒲の葉で編んで作ったことから蒲簀といったということである。

帖佐で作られた叺は丈夫で長持ちすることが評判で、県内一の生産量であった。

薩摩外交を支えた御里窯

竹之下　洲　一

今年4月、御里窯跡出土茶道具43点が、堂平窯跡のものと共に県指定文化財となった。これを記念し、市歴民館では「薩摩焼のはじまり」の特別展を開催した。

御里窯跡では茶道具の中でも「茶入」が多く出土している、「薩摩茶入」は当時献上品・贈答品としてもてはやされた。

私はこれまで、御里窯は島津義弘が好んだ茶の湯のために、陶工金海に焼かせた「義弘のお楽しみ窯」とだけ認識していたが、江戸初期の不安定な藩を存続させるため、「茶入れ」を活用した「薩摩外交を支えた窯」でもあったのである。

編集後記

3月に姶良市誕生以来、私たちは加治木町・蒲生町の史跡ガイドもできるように研修を続けています。一面に研修の一部を記載します。

二・三面には、9月に実施した日置市の史跡を、地元観光協会の前田さんの案内で視察研修しました。その研修の一部を紹介します。

今後とも皆様方のご支援をお願いします。